



## 特集

# 後<sup>を</sup>継<sup>ぐ</sup>者<sup>たち</sup>

親の後を継ぎ、同じ仕事の現場で働く人たちにインタビュー。  
親子で働く良さや苦労の中から見えてきた絆とは――。

**あなたにとって  
働くこととは？**

将来、どんな職業に就こう。  
世の中にあるさまざまな仕事の中で、自分がしたいこと、自分に適していることは何なのだろう――。  
それは、人生の過程で、だれもがもつ夢や目標かもしれない。

食えること、生きることを支える第1次産業では、後継者が不足し、一定の職に就かない「フリーター」や就業のための活動をしない「ニート」が若年層で拡大するなど、現在の日本社会には、さまざまな就業問題がある。  
一方で、親の後を継ぎ、同じ仕事の現場でがんばって働いている人たちがいる。彼らにとって働くこととは？



高市克志<sup>かつし</sup>さん(34歳)  
父 幸夫<sup>ゆきお</sup>さん(66歳)  
〔灘町・二輪専門店経営〕

**灘町** みなみ商店街にある共和モーターズは、創業40年。その3代目を継ぐ高市克志さんは、ここでバイクの販売と修理、中古バイクの再生などを行っている。「父の全盛期が、バイクの需要が最も伸びた時期という要因はあるものの、父と母と従業員の仕事が地元密着をモットーに一生懸命働き、近隣のお客様に買っていただ

き、数え切れないくらいの修理をして、今に至っています。おかげで店舗も拡大し、かなり恵まれた職場環境で、私が入ってきました。」  
大阪の自動車整備専門学校で学んだ克志さんは、8年間、自動車メーカーのディーラーで整備士をしていた。28歳のとき、父・幸夫さんが体調を崩したのをきっかけに後を継いだ。「整備士時代は、整備の

仕事に専念できたのですが、ここでは、仕入れから、電話の応対、接客、経理まであらゆる仕事をこなさなければならず、大変ですね。」  
一方、自分の意見を言いやすいところに親子で働く良さを感じている。「長年の経験で体に染み付いている技術に関しては、父にはかないません。ただ、新規のお客様は要望が変わってきており、習ったこ



父の代で培った  
信用を引き継ぎつつ  
新しい客層にも  
受け入れられるよう  
がんばりたい

とをまったく同じようにしているのは、満足してもらえない部分もあります。」バイクの世界でも電子化が進んでいるため、新機種の講習会に積極的に参加するなど、知識と技術を磨くことに余念がない。  
「この仕事は、お客様の命を預かる仕事でもある。それを忘れず、これからも地域密着でやっていってほしい。」と幸夫さん。「顧客の要望に敏感なディーラーでの経験を生かして、お客様全員に常連さんになつてもらえるようにがんばりたい。」皆で力を合わせ、今日も商売に励む。

農業の  
楽しさを  
感じる日々です



たかとし  
竹内貴俊さん(22歳)

まさたか  
父 政隆さん(53歳)

〔中山町出淵・農業〕

**緑豊**

かな山々に囲まれた中山町小池地区。ここに、親の後を継ぐ若い農業者がいる。竹内貴俊さん、22歳。今春、大学を卒業し、農業に就いたばかりの青年だ。「どんな仕事に就くかは、親から自由にしたいと言われている。でも、小さいころから農業に興味があったんです。」

思っているみたいです。まだ農業1年生なんだからと言うんですけど。」

3,400㎡のビニールハウスで、主にトマトを作っている竹内さん一家。一日の作業は、朝7時ごろから始まり、日が暮れるまで続く。「もう少し休みがもらえるかと思っていましたが、収穫が最盛期の7月から10月の半ばにかけては、熟れすぎる前に採ってしまわないといけないので、雨が降っても作業の毎日でした。」出荷作業に追われ、1日の収穫量が最盛期で600kgから700kgにもなる。

県外の大学の農学部で学んだ貴俊さんだが、夏休みなどで帰省した際は、いつも農作業を手伝っていた。「大学時代に出会った苗木生産者の方の影響を受け、果物を育てることに興味を持っていました。今は、自分の畑をもらい、そこでブルーベリーを育てています。これからは、そのほかの果樹作りにも挑戦していきたいですね。」

エコ農法を採用し、農薬をなるべく使わないようにしている分、病害虫がつかないようにしたり、連作障害が出ないようにしたりと気を配る。「父の教え方は、スパルタですよ(笑)」。ちよっと教えたらできると

そんな貴俊さんを父・政隆さんはどう思っているのだろうか。「継ぐと聞いたときはやっぱりうれしかったです。この地区でも温暖化の影響で、できる作物が変化しています。これからは、その対応も必要になってくると思いますね。」

貴俊さんにとって農業の仕事とは?「今は厳しさよりも、楽しさを感じることに多いですが、この仕事は、親からもらった財産だから、守っていかなくてはいけないと思います。」そう言う貴俊さんの表情が、笑顔から頼もしい後継者の顔に変わった。

## 特集 後を継ぐ者たち

### 午後

4時半、辺りに夕闇が迫るころ、双海町下灘の豊田漁港に一艘の船が帰ってくる。亀岡茂弘さんと父・將志さんの乗る船だ。

茂弘さんが父親の後を継ぎ、漁師になろうと思ったのは、高校生のとき。「長男だし、家族や周囲からも当然、後を継ぐものだと思われていたところはありました。父親の仕事ぶりをなんとなく見ていたので、実際に漁に出てみて、予想外というようなことはなかったですが、冬の寒さはしんどいと思いましたね。父親の大変さを痛感しました。」

季節にもよるが、朝の3時には漁に出て、午後5時ごろ帰港する。漁場は佐田岬の沖。片道3時間半、往復で7時間の距離だ。主にアジ、アマギ、タイなどが獲れる。「漁師にとって一番うれしいのは、やっぱり魚がたくさん獲れたとき。」と茂弘さんは言う。午後6時。船から揚げた魚はすぐにセリにかけられ、京阪神の市場へと運ばれる。

第2・第4火曜日と土曜日、祝日の前日は休漁日。天候にも左右されるため

1年で漁に出られるのは140日程度しかない。しかし、冬場や漁のない日も、船や網などの漁具の手入れで忙しい。

「親子で働く良いところは、遠慮なくやれることかな。」そう言う茂弘さんも18歳から働き始めて15年。最初の2〜3年は慣れない作業に戸惑ったが、今では漁に行く場所の選定や船の操縦も任されている。

父親から見た茂弘さんの仕事ぶりは？「真面目によく働くと思うよ。直接言ったことはなかったけど、継いでくれたらという気持ちには十二分にあったから、高校を卒業して、継ぐと聞いたときは、うれしかったね。一緒に働くってケンカもするけれど、親子という信頼感がある。これからのいろんな人と話をして、自分の経験を豊かにして行って、ほかのだれにも負けん漁師になってほしいね。」

同じ年ごろで漁師を継ぐ仲間たちは、良きライバルでもある。経験とカンがものをいう厳しい世界で、自分の腕一本で稼ぐという自負と誇りを胸に、また漁に出る。



しげひろ  
亀岡茂弘さん(33歳)  
まさし  
父 將志さん(58歳)  
〔双海町串・漁業〕

漁師であることに  
誇りをもって  
働いていきたい